「世界一の不思議とは？」　プロティノスから学ぶ「美しい姿」　　　令和４年８月２８日（日）

●世界七不思議

　この一つがオリンピアにあったフィディアス作ゼウス像（紀元前430年頃）

　５世紀に、他の国に運ばれ、そこで消失した。（800年以上はこの世にあった！）

●多くの人がこの不思議について語っている。

「実際の人間でこのように美しい人はいない」

「この神の威厳は宗教に新たな次元を付け加えた」

なぜ、こういうことが可能か？

◎プロティノス［205-270頃］

『美について』　講談社学術文庫（斎藤、左近司訳）から引用。

●「美とは何か？」　逆に「醜い」とは何か？（７５頁）

　そこで諸君、ここに美とは逆のもの、すなわち魂に生ずる醜いものを取り上げ、美に対峙させたらどうであろうか。

　醜とは一体何であるか、何故に醜いものが現れるかが明らかになれば、おそらく我々の探求に寄与する所もあろうというものである。

　それではここに、醜い魂を仮定してみよう。

　それは放埒（ほうらつ）な、不正な魂である。

それは甚だ多くの欲望に満ち、甚だしき迷いに満ちている。

臆病故に怖れおののいている。

狭量なるが故に嫉妬羨望に駆られている。

考えることと言えば何によらず、地上の身にふさわしい卑しいことのみである。

それはあらゆる点において歪みを見せている。

不純な快楽を好み、肉体を通じて味わう生活に生き、醜を快なりと心得ているのである。

（私）プロティノスは難しいと言われ続けているが、この文は、比較的わかりやすいとされている論考。その中でも私はこの文章が一番端的に突き刺さった。

　身体的な美醜でなく魂（心、人間性）の醜さの問題

●では、「美」の本質は？（６５頁）

ものが美しいのは、「形」(eidos)に「与ること」（metochē）によってであると、我々は主張する。というのは、形を欠いてはいるが、「形態」（morphē）、すなわち「形」（エイドス）を受容するように定められているものはすべて、**形成する力であるロゴスや「形」に与らぬかぎり醜いままであり、神的なる「形成力」とは無縁のままにとどまる**からである。

かくして物の美は神的な「形」に由来する「形成力」（原語はロゴス）に関与すること（koinōiā）によって生ずるのである。

●私たちのどこがいけないのだろうか？（２００頁）

　かのものが無限であるのは、一より多くはないということによってであり、また、かのものに所属する何であれ限界があるなら接することになる隣接点など、かのものは持っていないということによってである。なぜなら、一であるのだから、測られることはなく、数になってしまうこともないからである。だから、他者との関係でも、自分自身との関係でも、限界づけられることはない。「もし限界があるとすれば、二となってしまうだろう。だから、姿もないし、形もない。部分がないからである」。そういったわけだから、**私たちの論が語っているようなものを、死すべきものの目を使って、追求してはならないのだ**。

　また、**感覚されるものがすべてであると考えるのが正しいという人のとるような仕方で、かのものが見られると考えてはならない**。

そういった人は、すべてのものの中で最高にあるものを否定することになるからだ。なぜなら、その人が最高にあると思っているものは、最低にしかないものだからである。嵩（かさ）の大きいものは、つまらないあり方をしているものである。

　究極のものは、有ることの始原であり、さらに、実体より権威あるものである。だから、自分の**思い込みを転換させなくてはいけない**。もしそうしないなら、君は、神を得ないまま取り残されるだろう。

　**ちょうど、祭りの際に、「食い意地が張っていた」ばかりに、神々のところに行く人には摂取の許されないきまりのものでおなかを満たして、食べ物のほうが、祭りが執り行われているその神を観ることより、より明白な現実であると考え、そこでの神事に与らなかったのと同じことである**。

　というのも、私たちの行う神事においても、神は見られないので、肉体によって見られるものだけを明白なものと信じ込む人々に、神は存在しないのだと思わせ、不信の念を起こさせるのだ。

　**それはちょうど、一生涯眠っている人々が、夢に見た物事を信じられるもの、明白なものと思い込んで、もし誰かが彼らを揺り起こしても、目覚めた目によって見られた事物を信じられずに、再び眠りに落ちていくようなものである**。

（私）「神事に与っているのに、目先のことに囚われ、与らないのと同じ」

ここが人間の大問題。

ロダンの言葉参照。

●ではどうしたら良いのか？（８７頁）

さて、この内なる眼は何を見るのか。目覚めたばかりの時では、この眼も、明るく輝くものを充分に眺めるわけにはいかない。したがって魂自身に、まず美しい仕事を眺める習慣をつけさせる必要がある。次いで美しい作品、と言っても技術芸術の作り出す作品ではなく、善い人と呼ばれる人々の作る作品を眺める習慣を養わせる必要がある。

  続いて、この美しい作品を作る人々の魂を見ることである。

　だが、いかにすれば、善い魂の素晴らしい美しさがどんなものかを見ることができるようになるのだろう。**汝自身に立ち帰り、汝自身を見よ、これがその方法である**。

　たとえ未だ美しくない自分を、君が見たとしても、彫刻家のように振舞うべきである。彫刻家は美しい作品に仕上げなければならない大理石を前にして、あるいは削り、あるいは滑らかにし、あるいは磨き、あるいは拭い、ついに大理石の中に美しい顔を浮き出させるに至る。これが彫刻家のとる道だが、君もそのように、余分な不必要な部分はすべて取り除き、曲がった部分はすべて正すべきである。暗い部分はすべて浄めて、明るく輝くようにしなければならない。

　**汝自身の像を刻む、この務めを中絶してはならない**。このように努めてゆけば、遂には徳の神的光が君の前に輝き出でるであろう。遂には「節制の美徳が聖なる台座に就く」光景に君も接することができるようになるだろう。…

　しかし、眼が悪の目やににかすみ、浄らかさを得ていなければ、あるいはその視力が弱ければ、見ようとしてもしりごみを覚えて、素晴らしく輝くものを眺めることができない。たとえ見得るものがすぐ眼前にあることを他人が指摘してくれても、何一つ見ることができない。すなわち見るものたる眼は、見られるものたる対象と同族化し、類似化した上で、観照にのり出さなければならないのである。

　その理由は、**眼が太陽と似ていなければ眼は断じて太陽を見ることができないし、魂もそれ自身が美しくなっていなければ、美を見ることができない**という点にある。神を観、美を観ようとする者は、誰でもまず何よりも、神に類似していなければならない、美しい自己となっていなければならない。

●なぜフィディアスはあの美しいゼウス像を作れたか？（１０８頁）

芸術が、自分の本当の姿に、あるいは、所持している姿に似せてものを作るとき──**芸術は作品の形成原理（ロゴス）にしたがって美しい作品を作る**はずである──、そのときの芸術は、外界のどんなものと比べても、はるかに卓越して美しい、芸術の美を持っているのであり、だから、芸術自身も、はるかに卓越して、真に美しいのである。素材の中に拡散していくものは、その度合いに応じて、「一つ所にとどまっているもの」より、弱くなってしまうというのが、まさにその理由である。要するに、すべてのものは、分散していくとき、自分自身から離れてしまうのだということである。たとえば、強さの場合には、強さが弱まってしまうし、暑さの場合も、暑さは弱まる。まとめて言えば、力というものは、分散すると、弱まるのである。美の場合も、同じことで、美は弱まるのだ。

だが、もし誰かが芸術を馬鹿にして、自然を真似しているだけではないかと文句をつけるなら、まず言ってやらなくてはならないのは、自然もまた別のものを真似しているのだということである。次に、知らせるべきなのは、**芸術は、感覚対象を単純に真似しているのではなく、自然が由来した、かの形成原理（ロゴス）を目指している**のだということである。

さらに、また、**芸術は多くのことを自分で作り出せるし、美を持っている**のだから、あるものを（美しくするには）欠けたところがあると思えば、欠けたところを補うこともできるのだという ことも了解させなくてはならない。たとえば、あの**フェイディアスもゼウス像を作成するとき、感覚対象に頼ることなく**、もしゼウスが私たちのところに目に見える形で姿を現そうと思われたら、きっとそうされたはずの姿かたちを思い描いて、作り上げたのであった。

◎ロダン（高村訳）

［フィディアス作アフロディテ像を見て］

この三人の女が坐っているに過ぎません。がその姿勢が実に滑らかで実に高貴で、まるで**眼に見えない絶大なある物に関与している**気がします。

　彼らの上にはまったく**大きな神秘が統治しています**。即ち、**無形な、永遠な「理法」**です。これには全「自然」が服従します。そしてこの女神もまた彼ら自身その天上界の召使なのです。

**古代彫刻！　私は自分が彼に対して持つこの永遠の愛に生きねばならない事を感ずる。**

**Sculpture: «L’antique! Je sens qu’il faut que je vive dans cet éternel amour que j’ai pour lui!»**

**どうして愛せないでいられよう。それこそ私を生かしめた！**

**何を生命と呼ぶか**。

あらゆる意味から**君を激動させるもの、君を突き貫くものの事**です。

**古代彫刻の作った魂は私の陳列箱の中でわれわれ自身のよりも活きている！**

◎ロマン・ロランの言葉［私が15歳時に読んだ高校の課題図書『ベートーヴェンの生涯』から］

「諸君がみずから意識しないときですら諸君は古代の諸彫刻作品の石の心臓に眠っている息を吸い込んでいるではないか。フィディアスの感覚と理性と生命の火との調和を吸い込んでいるではないか。」

◎西田幾多郎

● フィディヤスの鑿の尖（さき）から… 流れ出づるものは、過去の過去から彼の肉体の中に流れ来った生命の流れである。…そこには生命の大なる気息le grand souffle de la vieがある。（「美の本質」）

● 竹は竹、松は松と各自その天賦を充分に発揮するように、人間が人間の天性自然を発揮するのが人間の善である。…

花が花の本性を現じたる時最も美なるが如く、人間が人間の本性を現じた時は美の頂上に達するのである。善は即ち美である。

◎ゲーテ『ウィルヘルム・マイスターの遍歴時代』３巻18章「マカーリエの文庫から」

もろもろの芸術を自然を模倣するからといって軽蔑する者があるなら、それにたいしてはつぎのように答えられる。自然もまた多くの他のものを模倣しているし、芸術は目で見たものをそのまま模倣するのではなく、自然がそれによって成り立ち、それに従って自らを律するあの理念に立ち返るのだと。（岩波文庫、山崎章甫訳）

さらにもろもろの芸術は多くのものを自己自身のうちから生み出し、他面、美を自己のうちにもっているがゆえに、完全さに欠けている場合にはそれを補う。

こうしてフェイディアスは、感覚的に見たものは何も模倣しなかったけれども、ゼウスが私たちの目の前に現れたならばそう見えるであろうような像を感覚でとらえて神の像を作った。…

というのは、私たちが古代と向き合い、それによって自己を形成しようと真剣に考えるならば、私たちはその時はじめて本当に人間になれると感じられるからだ。

Wenn wir uns dem Altertum gegenüberstellen und es ernstlich in der Absicht anschauen, uns daran zu bilden, so gewinnen wir die Empfindung, als ob wir erst eigentlich zu Menschen würden.

文学や美術の創作を解する感受性の持主は、古典芸術に接すると、きわめて快く精神的な自然状態に置かれるのを感じる。そして今日に至るまでなおホメロスの詩篇は、何千年にもわたる伝統が私たちに担わした重荷から、少なくとも一時は私たちを解放してくれる力をもっている。

　 …fühlt sich dem Altertum gegenüber in den anmutigst-ideellen Naturzustand versetzt

◎『新約聖書』から

・「プネウマ」の意味は風、息、霊（英訳はspirit）

●コリント人への手紙第一６章19節：

（15）あなたがたは自分のからだがキリストの肢体であることを、知らないのか。それだのに、キリストの肢体を取って遊女の肢体としてよいのか。断じていけない。

（16）それとも、遊女につく者はそれと一つのからだになることを、知らないのか。「ふたりの者は一体となるべきである」とあるからである。

（17）しかし主につく者は、主と一つの霊になるのである。

（18）不品行を避けなさい。人の犯すすべての罪は、からだの外にある。しかし不品行をする者は、自分のからだに対して罪を犯すのである。

（19）あなたがたは知らないのか。自分のからだは、神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であって、あなたがたは、もはや自分自身のものではないのである。